

保育効果に関する研究

——就学期の子どもにおける保育経験の有無の比較——

研究第8部 牛 島 義 友

研究第8部 星 美智子

研究第8部 住 吉 玲 子

I 研究目的

従来の保育効果の研究は、環境差を考慮されていないため、保育経験の有無による差を保育効果としながらも、文化的環境によるちがいが大きな要素として結果を左右していた。本研究では、同地域内で保育所経験のある子とない子を抽出して個々に検査を行ない、保育効果を検討することを目的とした。

II 研究方法

<対 象>

同環境にて保育所経験児とその対照児を求める。調査であれば該当のものが1～2名でもよいが、実験するために同地域でまとまった数がほしい。僻地には保育所経験のない子が多数いても保育所もないので保育経験のある子がいない。幼稚園がなく保育所だけが設置されている地域で、その隣接地には保育所も幼稚園もない所であれば、条件にかなり子どもをある程度まとまった数だけ得られるわけである。この条件にみあう地域をさがすことは意外に困難であった。当初の計画では3ブロック（岩手県、茨城県、千葉県）各80名ずつ、240名を予定した。

岩手県岩手郡岩手町

盛岡市より東北本線で40分ほどの沼宮内駅が町の中心部である。北上山地と奥羽山脈に跨がる町で、面積360km²、人口21,725人。啄木の生地、浜民村の隣町である。各地区の公民館で検査を施行する。各地区は車で20～30分かかる距離に散在している。検査当日に保育所に行っていない子どもの欠席が多く、改めて浮島地区を追加する。

茨城県那珂郡山方町

水戸市から水郡線で50分の山方町駅が中心部である。鮎釣りの季節に、にぎわいをみせる久慈川の清流のほとりに位置し、山と川の自然にかこまれた町である。面積

84km²人口11,805人、小学1年生で1時間の距離を歩いて登校する子もいる地域である。この地方は過疎化現象で年ごとに児童数が減少している。今年度の入学児童数は昨年の半数に満たず、とくに保育経験のない子が少なくなっている。保育所の設置されたためもあるが、保育所のない地区から自家用車（農家の多くは車をもっている）を利用して隣の地区の保育所に通う子もいる。ここでは、各小学校を会場として就学健康診断日に検査を実施したので欠席者はひとりもいなかった。

千葉県印旛郡酒々井町

千葉市より成田線で50分の所に酒々井駅がある。成田空港から車で20分の位置にあり、付近は昨年より急激に土地開発が進み、山が切り崩されブルドーザーが入っている地域である。面積は19km²、人口6,040人の町である。この地方も3～4年前から保育所が設置されはじめた地域である。ここでも、教育委員会で予測していた入学児数は半減し、保育所経験のない子は激減していた。在家庭児の把握はむずかしく、保育経験のない子20名ということであったが、実際に各家庭に電話連絡してみると、通園バスや車を利用して、かなり遠くの幼稚園や保育所で集団生活を体験させており、予想の半数の10名であった。2ヵ月後の検査当日には、4名が転出、ひとりが欠席となりわずか5名になってしまった。酒々井町に近い本埜村（面積23km²、人口5,052人）も対象地であったが、教育委員会の入学児40名のうち保育経験のない子半数という報告に反し、実状は保育経験のない子は皆無の状態であった。

以上のように、在家庭児の実状の把握が困難な状態のため、検査当日になつての支障多く、当初の予定数を得ることができなかった。結局、全地域で保育経験児104名、対照児99名の資料をうるにとどまった（第1表）。

<手 続 き>

教育委員会の協力を得て、公民館あるいは小学校に対象児を呼び出し、ひとりずつの個別検査（約20分の所要

第1表

検査月日、 就学学校名	経験有・無		保育経験 あり			保育経験 なし			計		
	男	女	男	女	計	男	女	計	男	女	計
茨城県那珂郡山方町 1月11日山方小学校	20	18	38	2	0	2	22	18	40		
1月12日盛金小学校	0	0	0	8	5	13	8	5	13		
1月16日山方小分校	2	0	2	3	5	8	5	5	10		
1月18日野上小学校	1	2	3	10	5	15	11	7	18		
岩手県岩手郡岩手町 2月15日川口小学校	9	9	18	6	8	14	15	17	32		
2月16日水堀小学校	13	6	19	9	8	17	22	14	36		
2月17日一方井小学校	8	10	18	7	9	16	15	19	34		
2月17日浮島小学校	0	0	0	6	3	9	6	3	9		
千葉県印旛郡酒々井町 3月1日酒々井小学校	4	2	6	4	1	5	8	3	11		
計	57	47	104	55	44	99	112	91	203		

時間)をおこなう。検査者は当研究所で長年の検査経験をもつもの4名である。検査問題は、幼児総合精神検査、知能判定検査、ビネー検査のなかから、直接記憶などの保育効果に無関係なものを除いて編成した。

＜検査問題＞

I 数

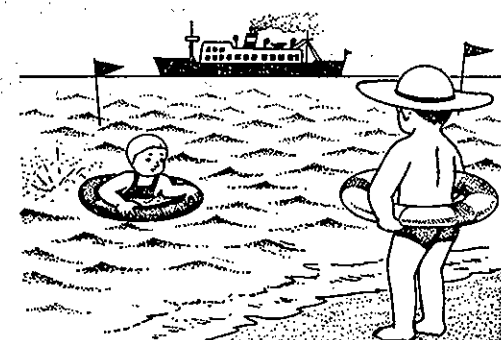
1. 13の数 13ならんだ円をかぞえさせる。2回のうち、1回でできれば合格とする。
2. 指の数 右手、左手、両手の指の数をたずねる。かぞえないで正しく言えれば合格。
3. 10の逆唱 20秒以内に10からの逆唱が正しく言えれば合格。
4. 20の逆唱 10の逆唱ができたものに20から逆唱させる。40秒以内で誤り1個までを合格とする。

II 言語

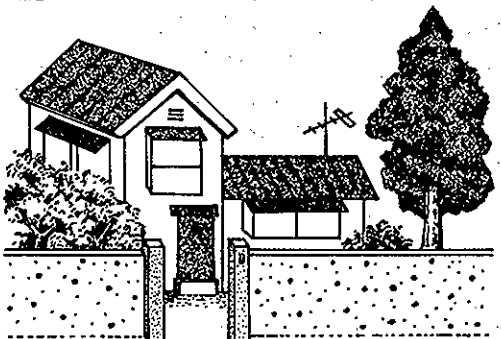
1. お金の名 1円、5円、10円、100円をみせ、いくらかを聞く。4個のうち、 $\frac{3}{4}$ でできれば合格とする。
2. 色の名 赤・黄・青・緑をみせて色の名を言わせる。全部でできれば合格。
3. 左、右の区別 右手、左耳、右眼、左手、右耳、左眼をそれぞれ指ささせる。 $\frac{3}{4}$ が合格。
4. 年月日 検査当日の曜日、月、日、年をきく。 $\frac{3}{4}$ 以上でできれば合格。
5. 語彙 ひとつのことばについて、その語を使えるかどうか、使わないが理解しているかどうか、二重のA・Bの質問によってたしかめる。例えば、《少ない》では、マッチ30本前後のものと10本ぐらいの二つの山を

(語彙検査図版)

《海》



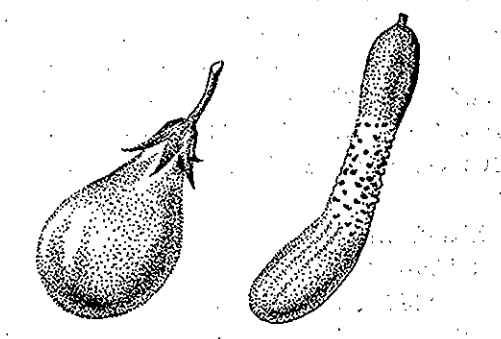
《窓》



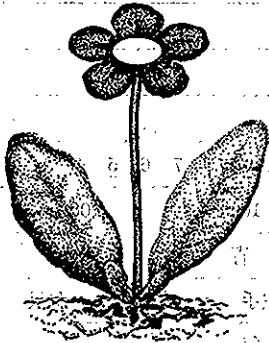
《怒る》



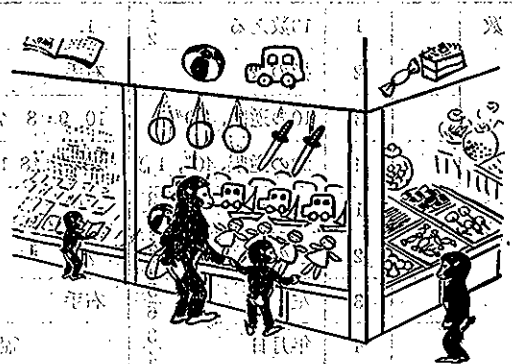
《なす》



《茎》

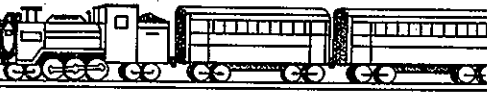
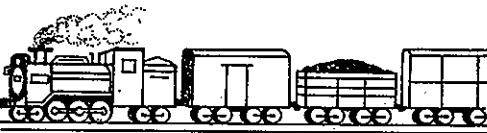


《お 店》

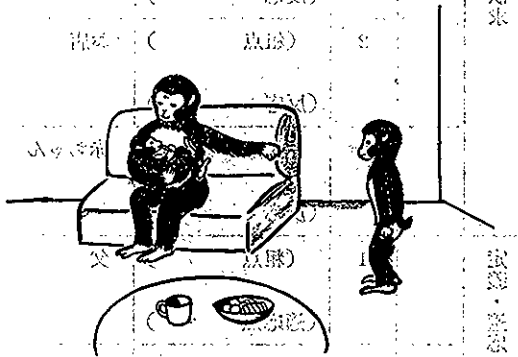


《1 分間映画》

《貨物列車》



《赤ちゃん》

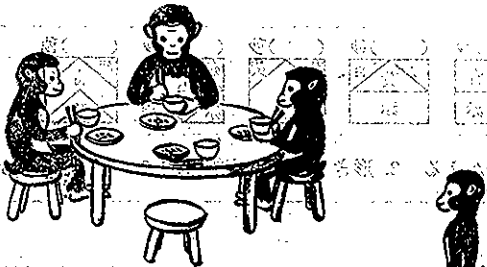


つくり、Aの質問「多い方はどれですか。では、こっちは？」とたずねる。「少ない」「少し」などと答えれば語彙使用A点（2点）を与える。言えない子どもには「少ない方はどっちですか？」とBの質問を追加して、できれば語彙理解B点（1点）を与える。

Ⅲ 叙述・欲求

1. 食事、2. お店、3. 赤ちゃんの3枚の刺激版（図7～9）をつかう。1枚ずつ絵をみせて、「これは何しているところでしょう。思ったようにお話してください」と教

《食 事》



示する。絵の中のものを列挙したり、不完全な叙述は1点、主語をいれた叙述、不完全な叙述を二つ以上の答えは2点、まとめた完全な叙述には3点を与える。粗点0点から最高9点。一方、投影法により表現されたものの中から反応分析をする。

Ⅳ 定義・適応

《父》《母》《友だち》《先生》について、それぞれ「あなたのお父さんはどんな人ですか？」というように質問する。「太っている」「眼鏡かけてる」など容姿の説明、また「今日転んだの」など一時的動作の説明は1点とする。性格や職業についての説明を2点、性格と職業、あるいは職業の完全な説明は3点とする。

Ⅴ 構成

4個の色積木で絵模様をつくらせる。刺激版6枚（検査用紙参照）。各問60秒以内にできれば合格とする。

Ⅵ 手先きのはたらき

《検査用紙1》

数	1	13数える $\frac{1}{2}$	1. 2.
	2	指の数	右手 左手 両手
	3	10の逆唱, 20"	10 9 8 7 6 5 4 3 2 1
	4	20の逆唱, 40", 1韻	20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1
	5	語彙 (粗点)	少しA. B一, 海A. B一, 窓A. B一, 怒るA. B一, なすA. B一, ひざA. B一, 腐るA. B一, 茎A. B一, 薄いA. B一, 貨物列車A. B一
言語	1	お金の名 $\frac{3}{4}$	1円 5円 10円 100円
	2	色の名 $\frac{4}{4}$	赤 黄 青 緑
	3	左・右 $\frac{5}{6}$	右手 左耳 右眼 左手 右耳 左眼
	4	年月日 $\frac{3}{4}$	曜 月 日 年
	5	語彙 (粗点)	少しA. B一, 海A. B一, 窓A. B一, 怒るA. B一, なすA. B一, ひざA. B一, 腐るA. B一, 茎A. B一, 薄いA. B一, 貨物列車A. B一
叙述・欲求	1	(粗点) (反応)	食事
	2	(粗点) (反応)	お店
	3	(粗点) (反応)	赤ちゃん
定義・適応	1	(粗点) (適応点)	父
	2	(粗点) (適応点)	母
	3	(粗点) (適応点)	友だち
	4	(粗点) (適応点)	先生
構成		総合せ 60" (粗点)	()秒  ()秒  ()秒  ()秒  ()秒  ()秒 
手先		紙切り () 秒	切る 1. はさみつかえる 2. 形きりぬく 直線 1. 2. 3. 曲線 1. 2. 3
運動		平均台 ()	
絵		人物画 ()	

はさみの使用から手先きの器用さをみる。直線と曲線からなる図形(検査用紙参照)をはさみで切り抜かせる。0点から最高8点の評価をする。所要時間を測定する。

Ⅶ 検査場面の態度

《検査用紙2》

検査場面の行動を言語・態度・興味など12項目について観察する。(以上、検査用紙参照。なお、平均台を渡らせること、人物画を描かせることの2問は、検査時間の都合上打切った)

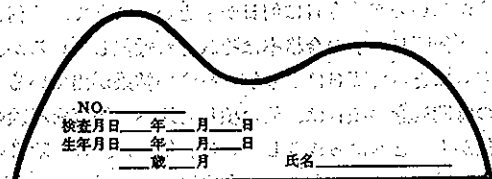
所属 _____ 検査月日 _____ 年 _____ 月 _____ 日 検査者 _____
 氏名 _____ 生年月日 _____ 年 _____ 月 _____ 日 男・女 _____
 年 令 _____ 才 _____ 月 保育所経験 ある(_____ 年) なし _____

検査場面 ☒ 土	(1) 同伴者から	すぐ離れる	離れにくい	離れないで同伴者と入室したり、泣く
	(2) 質問に対し	すぐ答える	繰返しきかないと答えない	いつまでもだまっている
	(3) 〃	よく考えて答える	ふつう	よく考えないで答える
	(4) 〃	思っている事をうまく表現する	ふつう	表現力に乏しい
	(5) 〃	ものがはっきり言える	ふつう	小さい声で話す 語尾がはっきりしない
	(6) わからないとき	考えてからわからないという	すぐわからないという	だまってしまう
	(7) 言語	明瞭	ふつう	不明瞭、吃音、赤ちゃんことば
	(8) 態度	おちついている	ふつう	おちつきがない 気が散りやすい 部屋の中を歩きまわる つねに身体を動かしている
	(9) 興味	興味をもち積極的	ふつう	興味がなく消極的
	(10) 緊張	ふだんと変らない態度	ふつう	緊張している
	(11) 自信	自信に満ちた態度	ふつう	自信がない態度
	(12) 動作	早い	ふつう	おそい のんびり 慎重

+ _____ 0 _____ -

《検査用紙3》

紙切り



〈日時〉

1972年8月～10月にかけて、研究方法、検査種目の検討をする。10月～12月、検査道具調整、検査用紙作製、および研究条件にあう地域をさがす。12月から1973年1月にかけて、検査実施の交渉や依頼をし、1月11日から3

月1日におたがって検査を実施した。

Ⅲ 結果

(1) まず、それぞれ個々の子どもについて、合格・不合格をきめる。保育経験のあるグループごとに合格人数を算出し、合格率をみる。第2表～第3表がその結果である。なお、 χ^2 検定を行ない、それぞれの小項目ごとに危険率5%以下のものを表の右に、* $=P<0.05$ 、** $=P<0.01$ として記入した。

数についてみると、1)13個の円を数えること、2)指の数をかぞえずにいえること、3)10から逆に唱えること、

第2表

	保育経験あり		保育経験なし		χ^2 * = $P < 0.05$ ** = $P < 0.01$
	実数	%	実数	%	
1. 13かぞえる	98	94.2	77	77.8	**
2. 指の数をいう $\frac{3}{4}$ (右手)	83	79.8	56	56.6	**
(左手)	92	88.5	81	81.8	**
(両手)	93	89.4	77	77.8	*
3. 10からの逆唱	84	80.8	59	59.6	**
4. 20からの逆唱	43	41.3	18	18.2	**
5. お金の名前 $\frac{3}{4}$ ~ (1円)	8	7.7	4	4.0	
(5円)	89	85.6	77	77.8	
(10円)	95	91.3	79	79.8	*
(100円)	76	73.1	64	64.6	
6. 色の名前 $\frac{1}{4}$ (赤)	98	94.2	82	82.8	*
(黄)	90	86.5	79	79.8	
(青)	59	56.7	38	38.4	**
(緑)	103	99.0	98	99.0	
7. 左・右 $\frac{3}{4}$ or $\frac{1}{2}$	100	96.2	84	84.8	**
8. 年・月・日 $\frac{3}{4}$ ~ (曜日)	77	74.0	68	68.7	**
(日)	66	63.5	41	41.4	**
(月)	75	72.1	63	63.6	
(年)	22	21.2	2	2.0	**
	56	53.8	15	15.2	**
	24	23.1	4	4.0	**
	54	51.9	13	13.1	**
	3	2.9	1	1.0	

第3表

	保育経験あり		保育経験なし		χ^2 * = $P < 0.05$ ** = $P < 0.01$
	実数	%	実数	%	
9. 語彙 1) 少し A	93	89.4	72	72.7	**
B	104	100.0	99	100.0	
2) 海 A	94	90.4	81	81.8	
B	102	100.0	99	100.0	
3) 窓 A	90	86.5	62	62.6	**
B	99	95.2	88	88.9	
4) 怒る A	103	99.0	94	94.9	
B	104	100.0	99	100.0	
5) なす A	70	67.3	72	72.7	
B	102	98.1	95	95.9	
6) ひざ A	72	69.2	66	66.7	
B	88	84.6	80	80.8	
7) くさる A	42	40.4	39	39.4	
B	98	94.2	90	90.9	
8) 茎 A	6	5.8	5	5.1	
B	31	29.8	21	21.3	
9) 薄い A	73	70.2	46	46.5	**
B	89	85.6	87	87.9	
10) 貨物列車 A	25	24.0	12	12.1	*
B	59	56.7	33	33.3	**

4)20から逆唱すること、すべてが保育経験のある子の方がすぐれている。20からの逆唱は両者ともに合格率が低い。ため、 χ^2 検定では危険率5%以上になっているが、他の小項目では明らかに両者の差があるといえる。とくに10からの逆唱は、保育経験のないもの18.2%に対して保育経験のあるものは倍以上の41.3%の合格率である。次にお金の名前についてみると、4問(1円、5円、10円、100円)ともに保育をうけた子どもの方が合格率が高い。1円と10円は保育を受けた子どもは90%以上、保育を受けない子どもは80%前後でちがいが明らかである。両群とも、10円が一番よく知っており、次に1円、100円、5円の順になっている。色の名前では、4色全部正答だったものは、保育経験のあるもの57%に対し、保育経験のないものは38%とかなりの開きがある。各色別にみると、両者とも赤、黄、青、緑の順の合格率である。赤は、どちらの群も1名ずつの誤答があるだけで100%に近い。他の3色は保育経験のあるものの%が高く、とくに

《緑》は、20%以上も正答率が高く、保育経験のないものでは半数以下の40%の正答率である。左、右の区別の問題では、保育経験のあるもの72%、ないもの64%の合格率であった。次の質問項目、曜日・日・月・年では、今年が何年であるかは両群にとってむずかしく、保育経験群3名、経験のない群1名が出来ただけである。次にむずかしいのが「今日は何日か」ということで、「何月か」「何曜日から」の合格率はそれぞれ近似しているが、子どもにとって曜日はより解りやすい結果が出ている。この時間観念の項目は、他の項目と比べて保育所経験の有無がもっともはっきりしている。年、月、日、曜日のうち $\frac{3}{4}$ 以上正解したものは、家庭児2%に対し、保育所児21%と10倍以上になっている。

語彙検査(第3表)では、どの語彙についても保育経験のある群が、少しずつ合格率は高いがそれほど顕著ではない。とくに語彙の理解(B)でみると、10問のうち、《貨物列車》が57%と33%で明らかな開きがみられるだけで

ある。語彙使用(A)で比較すると、《少し》《窓》《薄い》《貨物列車》の4語が両群の開きが大きい。さらに、語彙使用を2点、語彙理解を1点として各個人の点数を出し、その平均をとってみると、次のようにt検定の結果は1%の危険率で保育を受けたものの群の方がすぐれているといえる。

(語彙)

保育経験あり	保育経験なし
M 15.327	14.020
SD 2.490	2.229

$$t = 3.915 \quad P < 0.01$$

検査項目10は、絵をみて叙述させる問題であり、3枚の絵それぞれに0点～3点の評価が与えられる。個々人の合計点を出し言語表現力をみる。これを両群の平均で比較すると、次のようになり、保育経験のある群が有意の差で保育を受けない群よりすぐれているといえる。

(叙述)

保育経験あり	保育経験なし
M 4.125	3.687
SD 1.071	1.203

$$t = 2.733 \quad P < 0.01$$

検査11問の「定義」は、《父》《母》《友だち》《先生》の定義を0点～3点にそれぞれ採点される。この個人の合計点を出して各群の平均点によってその差の検定を行なうと、次のようになる。

すなわち、5%の危険率で保育経験のある方が良いといえる。

(定義)

保育経験あり	保育経験なし
M 4.731	4.012
SD 2.120	2.482

$$t = 2.221 \quad 0.02 > P > 0.05$$

第12問の「構成問題」では小項目が1問から6問まであり、全体で0点から6点にわたる粗点が出される。この正答数の両群それぞれの平均点を比較する。構成問題でも、保育経験のある群が対照群よりすぐれ、1%以下の危険率で有意の差がみられる。

(構成)

保育経験あり	保育経験なし
M 2.298	1.455
SD 1.813	1.604

$$t = 3.540 \quad P < 0.01$$

第13問「紙切り」の問題は、はさみの使い方、直線、曲線の切り方に分けて評価する。合計で0点から最高8点に採点される。また反応時間(所要時間)もストップウォッチで測る。切り方の得点平均、所要時間の平均(秒)、それぞれの両群の結果は次のようになっている。紙のきり方は保育を受けた子どもたちの方がすぐれている。また、所要時間も保育を受けた子が保育を受けない子より20秒近く早くできており、有意の差がある。

(紙の切り方)

保育経験あり	保育経験なし
M 6.053	5.182
SD 1.208	1.359

$$t = 4.837 \quad P < 0.01$$

(紙切り所要時間)

保育経験あり	保育経験なし
M 77.731 (秒)	96.228 (秒)
SD 31.637	37.011

$$t = -3.816 \quad P < 0.01$$

(2)

検査第10問では、3枚の絵(287頁参照)をみせ、それぞれの絵について叙述させる一方、投影法により子どもの欲求や不安などを知らうとするものである。全体に表現力が乏しく、両群とも絵の叙述段階にどどまるものが多かった。自己を投影しているもののうち不満や不安、敵意などの問題反応とみられるものを拾ってみる。実験群では15名であり、そのうち2名は二つずつの問題反応があった。対照群では5名の子にこの反応がみられ、各一つずつである。この点の平均で両群を比較すると、

(問題反応)

実験群 対照群
17(16.3%) 5(5.1%) $\chi^2 \quad P = < 0.01$

となり、保育所にいっている子の方に問題反応が多々みられた。

第14問は、《お父さん》《お母さん》《友だち》《先生》について定義をさせ、その表現から人間関係や適応をみる。「やさしい」「遊んでくれる」などの答えを+1点とし、「仕事している」「ごはんをつくる人」などを+0.5点、「背が高い」「顔がまるい」など説明的な定義は0点とする。「ときどき怒る」「ちょっと怖い」などを-0.5点、「こわい人」「意地悪する子」などの答えを-1点と評価する。無答のものや説明的定義を除いて適応点の平均で両群を比較する(第4表)。

保育経験のあるものの適応点は、《友だち》《お母さ

ん》《先生》《お父さん》の順になり、保育経験のないものは、《先生》が一番高く、《お母さん》《友だち》《お父さん》の順につづいている。両群を比較すると、《先生》が保育所にいかないものに高く、他は両群に差がみられない。

第4表 適応点

		N	M	SD	t 検定 (P)
父	実験群 (保育経験有)	54	+0.18	0.694	$0.8 > P < 0.9$
	対照群 (保育経験無)	40	+0.15	0.850	
母	実験群	54	+0.47	0.588	$0.8 > P < 0.9$
	対照群	42	+0.50	0.707	
友だち	実験群	21	+0.62	0.510	$0.8 > P < 0.9$
	対照群	18	+0.44	0.685	
先生	実験群	45	+0.30	0.702	$0.02 > P < 0.05$
	対照群	38	+0.62	0.567	
計	実験群	64	+0.98	0.253	$0.01 > P < 0.02$
	対照群	52	+1.13	0.383	

《先生》については、保育所に行かないものは、「いい人」「やさしい人」「何か教えてくれる人」といった答えが多く、保育経験のあるものは、「けんかすると怒る」「さわぐと叱る」など、保育場面にふれた先生の定義があり、-0.5点が多いためである。

全体の合計でも、保育経験のあるものの方が幾分適応点が低くなっている。しかし、いずれも不適応点より適応点の方に寄っており(十段階)、とくに問題はみられない。

なお、10問と11問について、答えなかったり、解らないと答えたもの、つまり0点のものをとりあげると第5表のようになる。

叙述・欲求では4~5%で両群とも同じような傾向である。定義・適応では保育を受けた子ども群に《父》《母》の0点のものが多く、《友だち》《先生》は逆に保育経験のないものは《友だち》で10%、《先生》で22%も実験群より無答が多くなっている。保育を受けない子は《先生》について答えられないものが保育を受けた子より倍以上あり、保育経験のあるなしのちがいははっきりしている。すなわち、保育所生活をしている子は当然のことながら、保育経験のないものより、友だちと先生への結びつきが強いといえる。

(3) 検査場面の態度

第5表

		保育経験あり		保育経験なし		χ^2 * = $P < 0.05$ ** = $P < 0.01$
		実数	%	実数	%	
叙述・欲求	1) 食事	4	3.8	4	4.0	
	2) お店	6	5.8	4	4.0	
	3) 赤ちゃん	6	5.8	5	5.1	
定義・適応	1) 父	24	23.1	16	16.2	
	2) 母	22	21.2	19	19.2	
	3) 友だち	18	17.3	28	28.3	
	4) 先生	23	22.1	44	44.4	**
合 計		103	14.2	120	17.3	

検査場面は12項目にわけて観察する(289頁参照)。一つの項目について3段階に分けられ、子どもの態度を観察して、その何れかに印される。しかし、一つの項目に二つ以上チェックされることもある。たとえば小さい声で話し、語尾が消えてしまえば、そのどちらにも該当することになる。また、前半は緊張していて、後半はすっかり普段とおなじ調子になれば、両方にチェックされる。したがって、一つの項目を合計しても総数と同じにならない。次に各項目一つ一つについて比較してみる。

1) 母親とすぐ離れることでは、全員のうち、母と離れにくかった子が1人あっただけで他は皆問題がなかった。

2) すぐ答えるのは、保育経験のない子にわずかに多いが、繰返し聞かないを答えない子もやや多くなり、保育を受けた子は「ふつう」の評価が多くなっている。

3) よく考えて答えるかどうかをみると、保育を受けた子の群がよく考えて答えている。

4) 表現力をみると、両群とも全般に表現に乏しい。保育を受けない群は31%と保育を受けたものより10%も表現に乏しいものが多くなっている。

5) ものがはっきり言えることについてみると、保育経験のあるものは、小さい声で話すものが25%、はっきり言える子は8%にすぎない。保育を受けない子は、はっきり言える子18%、小さい声で話すもの14%であり、保育を受けた子より保育を受けない子の方がはっきり話している。保育経験のある子の方は、検査者と一対一の場面で検査を意識しているといえよう。

6) 質問が困難であるときは、両群とも同じように、20%足らずのものが考えてから解らないと答えており、30%のものがだまってしまっただけで応じない。そして約半数の子は考えずにわからないといっている。

第6表

検査場面の態度	保育経験あり		保育経験なし		χ^2 * = $P < 0.05$ ** = $P < 0.01$
	実数	%	実数	%	
1. 母親からすぐ離れる	103	99.0	99	100.0	
2. すぐ答える 繰返し聞かないと 答えない	79 25	76.0 24.0	78 28	78.8 28.3	
3. よく考えて答える よく考えないで答 える	22 2	21.2 1.9	14 6	14.1 6.1	
4. うまく表現する 表現力に乏しい	6 22	5.8 21.2	9 31	9.1 31.3	
5. ものがはっきり言 える 小さい声で話す 語尾がはっきりし ない	8 26 2	7.7 25.0 1.9	18 14 3	18.2 14.1 3.0	*
6. 考えてから解らな いという だまってしまう	17 33	16.3 31.7	18 32	18.2 32.3	
7. 言語明瞭 赤ちゃんことば	4 6	3.8 5.8	11 11	11.1 11.1	*
8. おちついている おちつきがない	63 19	60.6 18.3	56 22	56.6 22.2	
9. 興味をもち積極的 興味がなく消極的	28 3	26.9 2.9	24 4	24.2 4.0	
10. ふだんと変わらない 態度 緊張している	48 26	46.2 25.0	55 21	55.6 21.2	
11. 自信に満ちた態度 自信のない態度	4 6	3.8 5.8	7 10	7.1 10.1	
12. 動作が早い 動作がおそい	5 7	4.8 6.7	8 7	8.1 7.1	

7) 発音の明瞭さは全般によくない。両群を比較すると保育経験のない群の方がすぐれている。しかし、赤ちゃん語や方言の多いものは保育を受けないものの方が多くなっている。

8) 落ち着きについてみると、両群ともほぼ同じ傾向であるが、保育所に就いている子どもの方が落ち着いているものが多く、とくに目立って落ち着きのない子は少なくなっている。

9) 興味をもち積極的な子は保育を受けた子どもの方がやや多くなっている。

10) 緊張している子は、保育経験のある群が幾分多く、保育を受けてない子どもの方がふだんと変らない態度のものが多。

11) 自信のある態度、自信のない態度をみると、どち

りも数少ないが、保育所に就いている子どもの方が普通の評価のものが多く、保育を受けていない子の群に自信のない子、自信に満ちた子、ともにわずかず多くみられている。

12) 動作の早い、おそいについては、どちらも5%から8%で、ふつうの子が殆んどであり、両群にちがいはみられない。

以上、検査態度の両群のちがいをまとめてみると、保育を受けた子どもたちは、保育を受けたことのない子どもたちに比べて、落ち着いており、よく考えて答え、興味をもって積極的であるが、緊張して小さい声で話す子は多くなっている。保育経験のない子は、緊張せず、ふだんと変らない態度、はきはき話す態度がみられるが、よく考えないで答える子、繰返しきかないと答えない子、落ち着きのない子が多くなっている。そしてまた、表現力に乏しい子、赤ちゃん語をつかう子も保育をうけた子どもたちより多くなっている。

なお、検査場面は-12点から+12点にわたって点数化して態度全般の評価をした。この点数の両群の平均はそれぞれ次のようになっており、検定の結果、両群に有意の差はみられなかった。

(検査場面)

	保育経験あり	保育経験なし
M	2.067	+ 1.990
SD	2.900	3.073

$$t = 0.184 \quad 0.8 < P < 0.9$$

(4)

われわれの対象とした両群と全国的基準とを比較してみる。本検査そのものは本研究のために作製したので、すべての問題にわたって対照することはできないが、いくつかの項目については、種々の検査と部分的に比較することが可能である。各検査の同問題の6歳児の合格率あるいは平均点を本対象児の結果と対照したものが第7表である。本検査対象児は、就学間近であり、6歳児なので各検査の合格率や平均点とはほぼ同じであってよい。ところが対照したどの問題でも各検査の全国平均より劣っている。とくに、20からの逆唱、色の名前、絵合せ(構成)の3問は差が大きい。20からの逆唱と絵合せは、保育所に就いている子は保育を受けない子の倍近くの合格率であるが、それでもなお、全国を対象とした同年令の子の合格率の半分ぐらいである。

IV 考 察

(1)

知的な問題について保育効果は非常に顕著にみられ

第7表 同年令基準との比較

(13かぞえる) %		(手指の数) %	
幼児総合検査	97.7	ビネー検査	85.1
実験群 (保育経験あり)	94.2	実験群	79.8
対照群 (保育経験なし)	77.8	対照群	56.6

(10からの逆唱) %		(20からの逆唱) %	
幼児総合検査	57.4	幼児総合検査	20.6
実験群	41.3	実験群	7.7
対照群	18.2	対照群	4.0

(お金の名前) %		(色の名前) %	
ビネー検査	87.8	乳幼児検査	66.0
実験群	85.6	実験群	56.7
対照群	77.8	対照群	38.4

(左・右の区別) %		(叙述) 平均点	
ビネー検査	73.3	知能判定検査	5.10
実験群	72.1	実験群	4.13
対照群	63.6	対照群	3.69

(絵合わせ) %		(紙切り) 平均点	
乳幼児検査	84.6	幼児総合検査	6.51
実験群	40.4	実験群	6.06
対照群	21.2	対照群	5.18

・幼児総合検査 (幼児総合精神検査対象児)	・ビネー検査 (鈴木ビネー検査対象児)
・乳幼児検査 (乳幼児精神発達検査対象児)	・知能判定検査 (知能判定検査対象児)

る。各小問ともに保育所経験のあるものの方がすぐれている。とくにその開きの大きいのは、「数」「色の名前」「時間観念(年、月、日、曜日)」「構成(絵合せ)」「手先きの働かし(紙切り)」である。保育における教育的働かしかけの効果が明らかに結果にあらわれている。

(2)

性格的な問題は、言語表現を必要とする2問であったため、全般的に反応が少なかった。それでも、保育を受けた子どもと保育を受けていない子を比較すると、保育経験のある子の方に反応が多くみられた。内容的にみると、保育所に通う子に欲求不満や不安が多くあらわれている。また、人間関係を通して適応をみると、保育所にいる子の方が適応点が低くなっている。保育所経験のないものは、《友だち》《先生》についての反応が少なく、とくに《先生》については44%が無答である。

現実に「先生」に接していない子どもたちなので当然であるが、それだけに応答したものは肯定的な答えが殆んどであり、そのため先生への適応点が高くなっている。しかし、欲求不満・不安の反応、適応状況ともに、保育経験のある子たちが保育を受けない子より悪いといっても、いずれも正常段階内にあり、とくに問題視される結果は出ていない。

(3)

検査場面の子どもの態度は、保育経験のある子の方が緊張しており声も小さい子が多い。しかし、落ち着いてよく考えて答えている。保育を受けていない子は、ふだんと変わらない態度ではっきり話す子が多いが、気が散りやすく、また、よく考えずに答えるものが多かった。保育所にいる子は、検査者との一対一の場面で検査を意識し、課題意識もしっかりしているが、それだけに緊張することになるであろう。とくに、方言の強い地方なので言語的表現を要する場面でそれが顕著にみられた。保育所に行っていない子の方が、方言や赤ちゃん語を意識せずにのびのびとふるまっていた。

(4)

以上、両群の比較をしたが、本研究で対象とした子どもたちとの結果と全国的な標準をひきあわせてみると、かなりの差がみられる。とくに、知的問題や言語表現力をみると地域差がいかに大きいかわらされる。保育所の設置されない地域では、近隣の保育所に通う子どもたちも、都市部とは文化的刺激に大きな差があるのである。したがって本研究では、はじめの目的にふれた、環境差を考慮しなければ保育効果をみるることができないことも立証することができたのである。

以上、僻地に近い農村部の保育効果を考え、保育の効果を取りあげてみると、知的教育に関した面においては顕著な効果を示している。保育所に行く、家庭ではえられない知的訓練や知的教育を受けているといえる。保育を受けた子どもの獲得した知識や技能は、全国の子どもに比べてみれば、普通能力であって、13まで教えたり、はさが自由に使えることは、この年齢のどの子にもできていることである。保育所にいない子どもがこの点で劣っているのは、いかに家庭において放任されていたかということのあらわれであり、この意味で保育所の効果は著しいといつてよいであろう。

しかし、社会性とか適応に関しては必ずしも良い効果があらわれていない。それはここでとりあげた問題にも原因があるかも知れないが、むしろ意外な結果であった。山村の子どもたちは、よそのものに対しては無口ではにかみやであり、十分自分の意志を表明できないなどと

いわれているが、われわれの検査者に対しては、殆んど
 こだわることなく自由に表現しており、保育所にいった
 からといってとくにこの点に相違はない。

元来、幼稚園教育は社会性を養うのが主であって知識
 教育をするところではないといわれており、保育所にお
 いては一層、教育的機能より養護的機能が強調されてい
 る。したがって、保育所で保育を受けることによって社
 会性の面ではより望ましい状態になっていくべき
 ことと思う。ところが結果は、必ずしもこのようにな
 っておらず、知的面ではかなり効果が出ているが社会性
 の面では差がみられていない。

果しているとはいえるが、それに重点をおきすぎている
 のではなからうか。先生との関係をみて、保育を受け
 た子どもの方が「先生はおくる」などといった表現が多
 くなっているが、保育所の保母はもっと親しくやさしい
 養護的性格の人であるべきなのに、教師的性格の方がつ
 りよく子どもに受けとられている。要するに、これらの保
 育所は教育的機能が過度に強調され、養護的機能に問題
 を残しているのではないだろうか。

もっとも、これはごく少数の事例であるので一般化す
 ることには問題があるが、山村の保育所の一つの問題点
 をついているものといえる。

このことは、これらの保育所が主として教育的機能を

...the fact that the children in the nursery school are not only receiving education but also receiving care and protection. This is because the nursery school is a place where children can learn and grow up in a safe and healthy environment. The children in the nursery school are not only receiving education but also receiving care and protection. This is because the nursery school is a place where children can learn and grow up in a safe and healthy environment.

...the fact that the children in the nursery school are not only receiving education but also receiving care and protection. This is because the nursery school is a place where children can learn and grow up in a safe and healthy environment. The children in the nursery school are not only receiving education but also receiving care and protection. This is because the nursery school is a place where children can learn and grow up in a safe and healthy environment.

...the fact that the children in the nursery school are not only receiving education but also receiving care and protection. This is because the nursery school is a place where children can learn and grow up in a safe and healthy environment. The children in the nursery school are not only receiving education but also receiving care and protection. This is because the nursery school is a place where children can learn and grow up in a safe and healthy environment.

Study on the Effect of Nursery Care

—Comparison between the Children who have experienced Nursery Care and those who have not at the period of attending Primary School—

Yoshitomo Ushijima
Michiko Hoshi
Reiko Sumiyoshi

In order to see the effect of nursery care of the day nursery, we chose the area where only a day nursery was established but no kindergarten, with neither a kindergarten nor a day nursery instituted in its neighborhood. In this same cultural environment, we sought both the children who had experienced day nursery care and those who had not, administered to them individual tests and studied the difference. The subjects are 104 children having nursery care experience, 99 controlled children totalling 203 in the mountain villages in Iwate, Ibaragi and Chiba Prefectures.

Studying the results, it was found out: 1) the nursery care experienced group excelled in each test item of intellectual problems, especially was remarkable in such items as "number," "the name of color," "time," "construction," and "finger manipulation." 2) To the characteristic tests, we may say the experienced group responded much more and excelled in verbal expressions. Examining the response details, it is found the experienced group expresses more frustration and anxiety, and adjustment point of human relations is also low. Yet, all these responses are considered to be within the normal stage and no abnormal reactions are found. 3) As to the children's attitudes in the test situation, those in the experienced group were composed and gave their answers after thinking over, but many children spoke in a low voice because of becoming tense. On the contrary, the controlled group was less strained, unconscious of dialect and infantile speech and responded with relieved feelings. But a lot of children responded without thinking hard, their attentions were easily distracted, and they were not aware of being given a task.

Thus, we studied the nursery care effect in the areas of mountain villages. In the intellectual aspect, remarkable effect is observed, and we may say that the children are receiving intellectual education which they cannot get at home. However, the levels of the knowledge and skill which the children with nursery care experience acquired are below the national standard, which fact shows how children are left alone in their own families. No nursery care effect is seen in the aspects of social development and adjustment compared with that on the intellectual aspect. It is presumed this is the manifestation of the fact that day nurseries in the areas of mountain villages place more importance on educational function rather than on fostering and protecting functions.